

## JALISAの活動に役に立つ書籍紹介

### 清末愛砂・松本ますみ編 『北海道で生きるということ 過去・現在・未来』 (法律文化社、2016年)

弁護士 中森 俊久

本書は、本来は先住民アイヌの土地である北海道の植民地支配の負の歴史を検証し、そこから派生する様々な問題を見据えたうえで、北海道の未来や平和を民主的な観点から切り開く糸口を提供するものである。第1部では、現在の課題として、道内の経済的格差・貧困の問題、人口減少や経済低迷に苦しむ室蘭市やその住民の自衛隊や安保法制に対する動きなどを具体的に紹介している(現在)。そして、第2部では、それら複合的な課題と結びつく北海道の過去(植民地主義、移民、アイヌへの差別等)を詳細に紐解くとともに、室蘭工業大学に通う学生が祖父母から聴取した道内での具体的なライフストーリーを紹介している(過去)。さらに、第3部では、そうした現在・過去を踏まえ、貧困や差別の問題等も含めた「身近な暴力」を解消するための広い意味での「平和」を作り出す方法を、世界各地で実施されている平和構築講座や国策に翻弄される中で生まれた根釧原野における民衆闘争等を紹介する中で探っている(未来)。



私自身、アジア太平洋戦争の末期、多数の北海道出身の兵士(アイヌ、和人)が沖縄に投入され、その結果、沖縄戦に動員された日本兵のなかでは北海道出身者が最大の犠牲になっていることを知らなかった。そして、北海道が沖縄とともに、大日本帝国の内なる植民地として位置づけられ、現在も北海道に自衛隊の施設が集中しているという事実についても、1972年までアメリカの占領統治下におかれた沖縄の歴史の問題と比較すれば、その認識・関心が薄かった。編者である松本ますみ教授は、本書で紹介されている座談会の中で「明治以来の150年の近代化に対する検証が必要ではないかと思うのです。~中略~近代化には暴力も自然の破壊もあり、また『内地』であぶれた人々が北海道でようやく食いつなぐことができたという喜ぶべき事実もあったわけです。それを全部承継しながら、同時にこれらはいったい何であったのかという検証をすることなしには、次には進めないと思います。」と述べておられるが、本書を読んでまさにその通りだと感じた。

北海道は、現在急激な人口減少に直面している。そこに至る迄には、開拓史以来の北海道の約150年の歴史が存在する。本書は、そうした北海道の現実を直視しつつも、若者を戦争や貧困から守りたい、誰もが安心して生きることができる北海道になって欲しいと願う優しさや希望にも溢れており、決して後ろ向きな本ではない。北海道出身の友人に本書を是非差し上げたくなった次第である。なお、編著者のうち、清末愛砂さん(室蘭工業大学大学院准教授)は、国法協の理事である。